

『仁王經開題』の背景思想

足立俊弘

一 はじめに

弘法大師空海の作とされる『仁王經開題』⁽¹⁾（以下『開題』）は護国經典として名高い『仁王經』⁽²⁾の開題である。『仁王經』は古来、中国、朝鮮、日本において護国經典の一つとして尊ばれており、經にもとづく仁王會がしばしば催された。中国では、陳武帝の永定三年（五五九）に仁王大齋が開かれたのを初めとして、唐代に至るまで盛んに行われた。日本では、齊明天皇六年（六六〇）五月、百高座と百衲袈裟を造り仁王般若會を設けて以降、⁽⁴⁾宮中や諸寺で護国法會として頻繁に行われた。一方で『仁王經』には古くから「偽經」⁽⁵⁾との疑いがつきまとい、その成立について様々な議論があるが、現在に至るまで明確な結論は出ていない。⁽⁶⁾

『仁王經』の注釈疏は、經録や現存注釈疏中の佚文などから、数多く存在したことが知られるが、唐代までの中国撰述のものは、『智顗疏』⁽⁷⁾、『吉藏疏』⁽⁸⁾、『円測疏』⁽⁹⁾、『良賁疏』⁽¹⁰⁾が現存しており、他にも敦煌出土古写本の『仁王般若実相論』⁽¹¹⁾と『仁王經疏』⁽¹²⁾が大正藏に収められている。これら現存しているもののうち、最も成立が早いと思われるのは隋代の『吉藏疏』⁽¹³⁾であるが、敦煌出土本『仁王經疏』には、「開皇十九年（五九九）

六月二日」の日付があり、『吉蔵疏』とともに現存注釈疏としては最古層に属す。ただし散逸した『真諦疏』は『吉蔵疏』にたびたび引用されるため、これより古いことが確認される。この後に唐代の『円測疏』、『智顗疏』、『良賁疏』が続く。⁽¹⁴⁾この中で『良賁疏』だけが不空訳に対する注釈であり、他は羅什訳を用いている。日本撰述の注釈疏は、八世紀中頃に成立したと思われる行信の『仁王經疏』⁽¹⁵⁾がある。大師以前成立の注釈で現存するのは以上挙げた七本である。

『開題』には「具如疏釈」⁽¹⁶⁾、「具如疏釈之」⁽¹⁷⁾と二ヶ所において他の仁王經疏からの影響を示す記述が見られる。先学はこの「疏」を、『智顗疏』、『吉蔵疏』、『円測疏』、『良賁疏』など漠然と中国撰述注釈疏を想定して、そのうちの特定の疏を指すとは見ていない。⁽¹⁸⁾本研究の目的は、この「疏」がある特定の疏を指すものと仮定し、それが何であるかを突き止めることにより、『開題』における背景思想を明らかにし、さらには弘法大師教学における護国思想解明の一助とすることである。調査の対象とするのは先の七本の注釈疏である。これらの疏は、それぞれ先に成立した疏の影響を受けている場合がある。例えば、『円測疏』には現存しない『真諦疏』がしばしば引用される他、『吉蔵疏』の影響も見られる。⁽¹⁹⁾『真諦疏』は『吉蔵疏』にも引用されている。また『智顗疏』⁽²⁰⁾には『吉蔵疏』と『円測疏』の影響が見られ、⁽²¹⁾『良賁疏』にはしばしば『円測疏』の影響を認めることができ、⁽²²⁾『智顗疏』を参照したあとも確認できる。さらに『行信疏』は全段が『円測疏』の抄出という構成になっており、他に『吉蔵疏』や唯識系学匠の疏をもつて補っている。⁽²³⁾『開題』と各疏の調査は、このような相関関係に十分注意を払いつつおこなった。

結論の一部を先に述べると、『開題』には、『円測疏』、『良賁疏』の影響が随所に見られる一方、敦煌出土本二本の他、『吉蔵疏』、『智顗疏』、『行信疏』からの直接的影響は確認できなかった。ここでは、調査の結果を、「不空訳と羅什訳」、「三時教判」、「内護外護」、「釈題目」、「三分科経」、「護国品の科文」の六項目に集

『仁王經開題』の背景思想（足立）

約して報告し、最後に一考を加える。

二 不空訳と羅什訳

『開題』は、羅什訳と不空訳、どちらの開題であるのか。⁽²³⁾ 本文には、

經有四譯。一晉代三藏竺法護譯為一卷。二後秦三藏鳩摩羅什譯為兩卷。三梁朝三藏真諦譯為一卷。四
 巨唐三藏不空譯為二卷。然晉本方言尚隔。梁本隱而不行。唐本間以流布。秦本盛傳字內。今所講者是
 其本。⁽²⁴⁾

とあるように、「唐本（不空訳）」があるにもかかわらず、「秦本（羅什訳）」を用いることが明言されている。また不空訳については「唐本間以流布」と記しており、「盛傳字内」とする羅什訳とは普及状況に差があったことがわかる。日本では奈良時代以来の羅什訳『仁王経』の伝統があるため、既に羅什訳は相当に広まっていたのに対し、『開題』製作当時は、不空訳は未だ流布の途上にあつたことがうかがえる。

伝統的に『仁王経』は、東密においては不空訳、台密においては羅什訳を用いるとされている。⁽²⁵⁾ また真言教学において、用いる經典に不空訳とそれ以外の訳が存在する場合、不空訳を用いるのは一見自明のようでもある。⁽²⁶⁾ しかも不空訳『仁王経』は、『仁王念誦儀軌』、『仁王般若陀羅尼釈』とともに大師によって請来された經典であり、⁽²⁶⁾ 大師が羅什訳でなく不空訳を用いる必然性は十分に存在すると言える。

また『性霊集』には、「奉爲國家請修法表一首」なる上表文が収められている。

其所将来經法中。有仁王經。守護國界主經。佛母明王經等念誦法門。佛爲國王。特說此經。摧滅七難。調和四時。護國護家。安已安他。此道秘妙典也。⁽²⁷⁾

この文には弘仁元年（八一〇）十月二十七日の日付があることから、同年九月に発生した薬子の変による朝廷の混乱を鎮めるために、大師が弟子らを率いて修法することを請うたものとみなされている。ここでは、『仁王經』の他に『守護國界主經』⁽²⁸⁾、『仏母明王經』⁽²⁹⁾の三つの經典名が挙げられているが、「其所将来經法」とあるので、ここで言う『仁王經』は、大師が請来した不空訳であり、また「念誦法門」との記述からも、やはり羅什訳ではなく陀羅尼を備えた不空訳『仁王經』を指すことがわかる。この文が著されたのは、大師帰朝後四年が経過した、高雄山寺に住していた頃で、朝廷や仏教界では大師の存在感が未だ鮮明ではなかったと思われる時期である。わざわざ上表文を出して国家のために護国の修法を行い、一宗の確立を誇示せんとするからには、奈良朝以来伝統的に用いられている羅什訳ではなく、自らが初めて持ち帰った不空訳經典を用いるのは当然であつたろう。

大師と『仁王經』の関連を示す史料には、他に「被修公家仁王講表白」⁽³⁰⁾、「講仁王經願文（或曰開題）」⁽³¹⁾等があり、また『高野大師御広伝』巻下の天長元年（八二四）九月二十二日条⁽³²⁾には、大師が図書寮に不空訳『仁王經』を書写せしめる内容の太政官符が掲載されている。これらの史料は真偽が定かでないために、扱いには慎重を要する。しかし敢えて言えば、これらは明らかに不空訳との関連を示すか、またどちらの訳と関係するのか判然としないのに対し、『開題』だけが羅什訳との関係がはっきり認められる唯一の文献史料であるということが指摘できる。

『仁王經開題』の背景思想（足立）

最後に『仁王經』諸訳について述べた釈文における、『開題』と『良賁疏』・『円測疏』との関係について一言付け加える。『良賁疏』の記述は『円測疏』に依っていたためかよく似ている。⁽³³⁾『開題』は両疏によく似ているので、どちらかあるいは両方を参照したと思われる。

三 三時教判

『開題』には、法相教学で説かれる三時教判について言及している部分がある。

設教三時化生千品。初為趣聲聞乘之者轉四諦法輪。次為趣菩薩乘之者説諸部般若。後為趣一切乘之者説中道一乘。今此經者。據教判則属第二時。據理決則通第三時。⁽³⁴⁾

ここでは、三時教判の根拠とされる『解深密經』無自性品の所説を略述した後、⁽³⁵⁾『仁王經』は三時教判に従えば第二時に属するが、理決に依れば第三時に通ずる」と説いている。この説から二つのことが読み取れる。一つは、『仁王經』を第三時了義教に通ずるものと位置付け、三時教判の枠組みの中で本經の価値を高めようとしていること。もう一つは、般若經典であるが故に本来は第二時に属すべき『仁王經』を、理決に依れば第三時教と同等であるとする、独特の見解を示していることである。

三時教判における『仁王經』の位置付けに関しては、『円測疏』と『良賁疏』の双方に説かれている。『良賁疏』の記述は『円測疏』を参考にしたものと思われるが、若干内容が異なる。ここでは『開題』と円測良賁二疏の内容を比較検討する。まず『円測疏』では次のように説かれる。

此經世尊自判。三法輪中無相爲宗。故解深密經作如是說。初爲發趣聲聞乘者。說四諦輪如四阿含經。次爲發趣菩薩乘者。無相輪諸般若等。後爲發趣一切乘者。說了義教。(中略)問若爾如何第二無相。名爲不了。解云。據實具說三種無自性性。理無淺深。以隱密相。言一切法無自性等。而不分別配三無性。深密經等。廣顯三種無自性性。是故第三法輪門中。加無自性性四字。意顯別有三無性理。由是名爲不了義。非理淺深名了不了。⁽³⁶⁾

円測は、『仁王經』は第二時無相を宗とすると述べた上で、その根拠として『解深密經』無自性相品の説文を引く。そして、「この無相輪は三性中のいずれを遣るのか、三無性中のいずれに依るのか」という問いを設定し、長文のためここには引用しなかったが、更に清辨と護法の論争について述べている。⁽³⁷⁾そして最後に再び、「なぜ第二時無相輪を不了と名づけるのか」という問いを設定した上で、「第二時教も第三時教と同じく三種無自性性を説いており、双方の理に浅深は無い。ただ第二時教は、隱密相をもって説き、第三時教は經文に「無自性性」の四字を加えて顕わに説くから、了・不了と名づけるに過ぎない。理に浅深があるから了・不了とするのではない。」と述べている。⁽³⁸⁾この部分には、『仁王經』を釈するにあたって、唯識によることの正しさを示そうとする意図があるということが先学により指摘されている。⁽³⁹⁾

一方良賁は円測と同じく三時教判説について述べているが、内容には相違が認められる。良賁はまず、「明經宗」の段で、「若論至理清淨法界言語道斷。宗何所宗」⁽⁴⁰⁾として、經宗など論すべきでないと断ずる。そして「今依文判教」として三時教判説等を述べるが、最終的には「聖不相違」と締めくくっている。⁽⁴¹⁾つまり經宗の別を認めないということになる。そして「所攝所被」段の「時所攝」において次のように説く。

『仁王經開題』の背景思想（足立）

若唯頓教時但唯一對不定性。大由小起漸次而被可有^三時。解深密經約此而判。今者此經約漸次說容第二時。隨頓教性總不立時。設令立時第三時故。何以知然。廣明大乘十四忍門。從淺至深革凡成聖。具明空有備陳行位。豈但說空爲第二時。問解深密經據說空教諸般若等爲第二時。又大般若數處經文諸天讚佛云第三時。答如彼經中說非空有爲第三時。如華嚴等。理實而言。華嚴十地金光明等具明大乘非空非有治斷行位三賢十地故爲第三。此經亦然。豈爲第二。又彼據漸次可云第二。此約頓悟故云第三。進退皎然豈違教也。⁽⁴²⁾

良賁は「若し頓教なら時は一つであるが、不定性に対せば大は小より起こり漸次となるので、二時がある。今この經を漸次に約して第二時とするが、頓教に随えば総じて時は立てない。仮に時を立てて三時というだけである。」としている。これは窺基撰『成唯識論述記』の説を参照したと思われる。⁽⁴³⁾『良賁疏』では更に、『仁王經』は『華嚴經』等と同じく「大乘非空非有治斷行位三賢十地」を明かすのだから第三時とすべきであり、漸次に依れば第二時だが頓悟に約せば第三時であると結論付けている。

『円測疏』も『良賁疏』も、第二時と第三時の差異を強調せずに、『仁王經』が第三時了義教に等しいと結論付けている点では大同である。ただし『円測疏』では、第二時教も第三時教も無相の理を説くという点では同等であり、理において浅深は無いとして、「理」を強調している。一方で『良賁疏』は、『成唯識論述記』の説に随い、頓漸の概念を用いて『仁王經』の価値を高めようと図っている。

『開題』は両疏と同じく『仁王經』を第三時教に匹敵すると位置付けている。ただし「依理決」として根柢を「理」に求めており、その点で「理」を強調する『円測疏』により近いと言える。

また『般若心経秘鍵』にも、三時教判について言及している部分がある。

或問云般若第二未了之教。何能吞三頭之経。如來說法一時含五乘之義。一念說三藏之法。何況一部一品何置何無。龜卦爻著含萬象而無盡。帝網聲論吞諸義而不窮。難者曰若然前來法匠何不吐斯言。答聖人投藥隨機深淺賢者說默待時待人。吾未知。蓋可言不言不言不言言之。⁽⁴⁴⁾失智人断而已。

ここで大師は問答を設定している。まず難者が、「般若は第二時未了の教であるのに何故第三時の經典を呑むのか」という問いを発する。それに対し大師は、「如來の說法は一時に五乘の義を含み、一念に三藏の法を説く」と答える。問いの前提である三時教判を全く無視した論法である。『般若心経』を般若經典としてではなく、密教經典として解釈するという目的のもとで著された本書の性格の一端を表していると言えるだろう。それに対して『開題』は、あくまでも三時教判の枠組みから離れようとしておらず、『秘鍵』における態度とは明らかに隔たりがある。

四 内護外護

『開題』とそれ以前の諸疏には、内護外護という語を用い、「内外」の二元論的枠組みで經典を理解する方法が見られる。説かれる内容を整理すると、以下の三点にまとめることができる。

- ① 各品の内護外護への配当
- ② 内外の枠組みにもとづいた「国」の定義

『仁王經開題』の背景思想（足立）

③能護（護る主体）と所護（護られる対象）

この項では、この三点について、『開題』における他疏からの影響を検証する。まず①であるが、諸疏のうちで、各品の内護外護への配当が最初に見られるのは『吉蔵疏』である。

第一前之三品明能護波若亦名内護。第二護國一品明所護國亦名外護。⁽⁴⁵⁾

『吉蔵疏』では、観空品、菩薩教化品、二諦品の三品を内護に、護国品を外護に配当している。『円測疏』は以下に示す通り、『吉蔵疏』と全く同じ配当である。

明正説分。總分爲三。初有三品。正名内護。次護國品。辨其外護。後散華品。荷恩供養。⁽⁴⁶⁾

『良賁疏』は、内護に序品以下の三品を配当するという点では『吉蔵疏』・『円測疏』と同じだが、外護には護国品の他に不思議品と奉持品も加えている。

國有淨穢分爲二護。卽前三品明其内護。護佛菩薩諸淨土故。觀如来品彰其果徳。菩薩行品具明修因。後二諦品前二依故。⁽⁴⁷⁾後之三品明其外護。護諸王等所居士故。初護國品明其報得。不思議品彰法勝能。後奉持品明前二故。

『開題』では、「第一叙来意」の初めに次のように説かれる。

第一叙来意者。上明内護護出世之行相。今説外護護世間之因縁。⁽⁴⁸⁾

「今」というのは護国品を指すのであるから、護国品は外護を説くものとされる。また「上」というのは護国品の前の、観空品、菩薩教化品、二諦品の三品を指すので、この三品は内護を明すとされる。この配当は『吉蔵疏』、『円測疏』と同じであり、直接的には『円測疏』からの影響と見るべきであろう。

次に②の、「国」の定義であるが、『円測疏』における護国品の「釋品名」段には、『真諦疏』における「国土」の二義が引用されている。そこには、

若依本記。國土有二。一世間。二乘凡夫。二出世。十信至十地。賊有二。一外。劫盜禽獸等。二内。所謂煩惱。護有二。一外。即百部鬼神。二内。所謂智慧。若内若外。悉是諸佛菩薩神力。⁽⁴⁹⁾

とある。真諦は「国土」の義について、「世間」と「出世間」の二義ありとしている。真諦はまた、「賊」と「護」についてそれぞれ内外二義ありと説いているので、「国土」についても内外の語は用いていないものの、同様に内外の二義を述べたものと考えられる。

『円測疏』ではこの『真諦疏』の引用の後に、次のように自釈が述べられる。

今解。般若能護人天國土。故名護國。經爾時般若波羅蜜。釋曰。自下第二依文正釋。能護佛果及十地行。皆是内護。護人天處。即是外護。上來已釋二種内護。故今第二明護國品。⁽⁵⁰⁾

『仁王経開題』の背景思想（足立）

これによれば、『円測疏』における「国」とは「人・天・国土」ということになる。⁽⁵¹⁾ 円測は、この「人・天・国土」を護ることがすなわち外護であるとしている。護られる対象としての「国」を考える場合に「内外」の枠組にもとづいた定義づけをするという点で、円測は真諦を継承している。ただし円測の言う「国」（人・天・国土）は、真諦の示した二義のうちの「世間」と合致する。真諦が広義の「国」を示したのに対し、円測が説いたのは狭義の「国」であるとも言えるだろう。

『良賁疏』では、先の①で示した観如来品の釈文中に「国」の定義が見られる。すなわち良賁は「國有淨穢分爲二護。」として、「国」に「淨」と「穢」の二護ありと釈して、これを内護外護に配当し、「淨」を「佛菩薩諸淨土」、「穢」を「諸王等所居土」としている。ここでも同じく内外の枠組が用いられているが、狭義の「国」をとる『円測疏』ではなく、世間出世間の二義ありとする『真諦疏』に近い。⁽⁵²⁾ 一方『開題』では次のように説かれる。

言護國者。國之言雖是惣名。欲明法用更爲別品。有情世間及器世間合名爲國。般若能護此二世間。攘灾招福故名護國。⁽⁵³⁾

『開題』は、三種世間のうち有情世間と器世間が「国」であるとする。ここでは、有情世間と器世間がひと括りにされていることに注目したい。それにより、この三種世間を世間出世間の二元論に捉えなおすことが可能になる。すなわち「有情世間と器世間」が「世間」、「智正覚世間」が「出世間」に対応する。こうしてみると、これも内外の枠組にもとづいた「国」の定義づけであることがわかる。「国」の定義については、以

上挙げた各疏間に多少の違いはあるものの、内外の二元論的枠組を用いるという流れは一貫している。他疏には見られない「三種世間」⁽⁵⁴⁾によって説明しているのが特徴的ではあるものの、『開題』もその流れを継承していると言える。ただし『開題』で「国」とされるのは、「有情世間と器世間（＝世間）」である。これは、「人・天・国土（＝世間）」とする『円測疏』の定義と近似している。

次に③について考える。内護外護という語は『仁王經』注釈疏成立以前から使われている。もともと外護とは、教団外において修行者や仏法の弘通を援護すること、あるいは援護する人々のことを意味していた。一方で内護が指すものは一定せず、戒あるいは出家修行者を表す場合があるが、いずれにしても内護外護とは、仏法や教団を護る主体を指す語として用いられていた。しかし『仁王經』諸疏では、内護外護の意味する内容に変遷が見られる。まず『真諦疏』には、

護有二。一外。卽是百部鬼神。二内。所謂智慧。若内若外。悉是諸佛菩薩神力。⁽⁵⁶⁾

とある。これによれば、外護とは「百部鬼神」、内護とは「智慧」であり、内護外護はそれぞれ劫盜禽獸や煩惱から、世間出世間を護る主体とされている。ここでは内護外護の双方が能護とみなされていると言える。次に『吉蔵疏』では卷上二と卷下五に次のように説かれる。

第一前之三品名能護波若亦名内護。第二護國一品明所護國亦名外護。⁽⁵⁷⁾

正説六品中上來三品明能護般若辨經力用。生菩薩二利能護佛因果。及知四生相寂了語因果本來不二。得

『仁王經開題』の背景思想（足立）

出世利益已竟於前。今此一品明所護國土辨世間利益。⁽⁵⁸⁾

これによれば、正説分六品中の三品が内護であり「能護般若」であつて、護国品が外護であり「所護國土」であるとされる。つまり、外護は護られるべき対象としての国土であるとして、所護としての外護が説かれるようになる。次に『円測疏』では、

今解。般若能護人天國土。故名護國。釋曰。自下第二依文正釋。能護佛果及十地行。皆是内護。護人天處。卽是外護。上來已釋二種内護。故今第二明護國品。⁽⁵⁹⁾

と説かれる。これによれば、「般若」が能護、「人天國土」が所護、ということになる。また円測は、「仏果十地行」を護ることが内護、「人天處」を護ることが外護として、所護としての内護と外護を説いている。護る主体を「般若」であるとする点は『吉蔵疏』と同じであるが、『円測疏』では「般若」を内護とはしていない。さてこれが『良賁疏』に至ると、

來前三品明其内護。護佛菩薩諸淨土故。⁽⁶⁰⁾（中略）後之三品明其外護。護諸王等所居土故。

とあるように、内護については「護佛菩薩諸淨土」、外護については「護諸王等所居土」と、両方とも護られる対象となり、所護としての内護外護が説かれるようになる。また『真諦疏』、『吉蔵疏』、『円測疏』では能護とされてきた「般若」は、「所護法」とされている。⁽⁶¹⁾

諸疏を具に読むと、内護外護の意味が能護から所護へと次第に変質していく過程が見て取れる。まず『真諦疏』では、内護外護は能護を意味した。『吉蔵疏』になると外護は所護、つまり護られる対象としての「国」を意味するようになる。それは『円測疏』にも受け継がれ、『良賁疏』に至ると、内護は「佛菩薩諸浄土」となり、両方とも所護の意味になる。このように意味が変質していったのは、護られる存在を強調することにより、經典の利益を際立たせようとする方向へ注釈者の意向が変化していったことが一因ではないかと考えられる。⁽⁶²⁾

最後に『開題』では以下のように説かれる。

上明内護護出世之行相。今説外護護世間之因縁。(中略) 般若之功必以護國土而為本。⁽⁶³⁾

内護とは出世間の行相を護ること、外護とは世間の因縁を護ることであるとされ、『良賁疏』と同じく所護としての内護外護が説かれている。また一方で「般若之功必以護國土」とも言い、護る主体は「般若」であるとする。こうしてみると『開題』は、内護外護を両方とも所護とする点では『良賁疏』の流れを汲むが、「般若」を能護とする説は、『真諦疏』と『吉蔵疏』を継承した『円測疏』の系統であると言える。

以上三点について検証した結果、「内外」の二元論的枠組によって『仁王経』を理解する方法は、『真諦疏』、『吉蔵疏』、『円測疏』、『良賁疏』の四疏に共通しているが、議論の内容には違いがあることが分かった。さらに『開題』は三点全てにおいて『円測疏』から影響を受けており、第三点については『良賁疏』からの依用も確認できることが判明した。

五 釈題目

經題釈の部分は、『良賁疏』には『円測疏』を参照したあとが見られ、『開題』には『円測疏』と『良賁疏』の双方の影響が見られる。まずそれぞれの經題釈の文を以下に挙げる。

『開題』

言佛說者。標所請之法王也。三覺圓滿名之爲佛。四辨巧用名之爲說。言仁者舉能請之國主也。仁者人也。上下相親謂之爲仁。王者主也。衆庶尊重謂之爲王。護者加衛也。國者城域也。般若者智慧義。波羅蜜者到彼岸義。經者貫也攝也。貫所詮義攝所化生。序者因由也。品者類別也。第者次也。一者首也。八品之中此品居首故云佛說等云々。⁶⁴

『円測疏』

題云佛說仁王護國般若波羅蜜經者。一部之通名。序品第一者。品内之別目。都名雖一。其義有四。理必歸眞。意存護國。一佛說者。所請法王。自他覺滿。開示妙法。故言佛說。二仁王者。能請國王。仁者忍也。善惡含忍。王者往也。衆所歸往。故名仁王。三護國者。請說所爲。四般若波羅蜜經者。辨能護法。般若名智。波羅蜜者云到彼岸。謂由智力到涅槃岸。經者素怛覽。此云契經。契謂契合。契當道理。含有情機。經亦二義。一者貫穿。二者攝持。貫穿法相攝持有情。故名爲經。就能所請及能所護。以稱經因。序謂由序。起正說之由致。品謂品類。或是義類。我聞等義類相從。攝義各別。名之爲品。八品之内。此

品最初。名為第一。故言。⁽⁶⁵⁾

『良賁疏』

然今題云。仁王護國般若波羅蜜多經者。總十一字上四下一俱是唐言。中間六字乃是梵語。仁王則諸主彰廣敬之令譽。護國則所為陳博愛之鴻業。言仁者人也。正理解人多思慮故。(中略)禮曰。上下相親是謂之仁。(中略)言王者主也。(中略)言護者加衛義覆攝義。蓋為仁王仰希如來大悲加衛。普覆含識攝受無遺故稱護也。言國者城也。^(注)四海八方有戴疆域。聖凡士庶各安其居。(中略)言般若者梵音也此云智慧。(中略)言波羅蜜者梵語也此云彼岸。(中略)言蜜多者梵語也。此具二義離義到義。(中略)言經者唐言者也。(中略)佛地論云。以佛聖教貫穿攝持所應說義及所化生。貫穿即縱攝持即經。(中略)言序者因由也。謂說般若起之由致。言品者類也。文義彙聚各區分。言第者次之居也。言一者數之始也。此經一部總有八品。此品居初故稱第一。⁽⁶⁶⁾

(注)大正藏の注記に依れば、校訂本である天曆二年(九四八)の石山寺藏写本には「城域」とある。

『円測疏』には、「佛説」の釈があるが、不空訳を用いる『良賁疏』には無い。⁽⁶⁷⁾『開題』には「佛説」を釈す部分があり、『円測疏』の記述とよく似ているため、この部分の釈は『円測疏』に依っていたと考えられる(史料の傍線〈破線〉部分)。また『開題』における「仁王護國」の字義釈は、『良賁疏』とよく一致しており、これを参照していることは明らかである(史料の傍線〈直線〉部分)。また「言仁者舉能請之國主也」とする部分は、『円測疏』からの引用と思われる(史料の傍線〈破線〉部分)。「般若波羅蜜經」の釈についてはそれほど特殊でないから、ことさらに近似性を強調する必要はないとしても、『良賁疏』は『円測疏』と文言がよく

『仁王經開題』の背景思想（足立）

似ており、『開題』もまた同様である。『開題』は経題を釈すにあたり、『円測疏』と『良賁疏』の双方を下敷きにしていたと考えられる。

六 三分科経

『開題』には三分法の科文が説かれるが、『円測疏』、『良賁疏』の双方に同様の記述がある。まず以下にそれぞれの釈文を挙げる。

『開題』

第三解本文者。其文如何。此經一部分為三段。最初一品為教起因緣分。次有六品為聖教所説分。最後一品為依教奉行分。説其所以具如疏釋⁽⁶⁸⁾。

『円測疏』

自有兩判。一依本記。大分爲四。一發起分。即初序品。二正説分。謂次五品。三王得護國分。即第受持品。四流通分。即囑累品。今判此經。依佛地論。大分爲三。初之一品。名教起因緣分。次有五品。名聖教所説分。後有二品。名依教奉行分。⁽⁶⁹⁾

『良賁疏』

先總判科後隨文釋經。眞諦記判釋此經大分爲四。一發起分即初序品。二正説分謂次五品。三王得護國分

即第七品。四流通分即囑累品。昔有晋朝道安法師。科判諸經以為三分。序分正宗流通分。故至今巨唐慈恩三藏譯佛地論。親光菩薩釋佛地經。科判彼經以為三分。然則東夏西天處雖懸曠。聖心潛契妙旨冥符。今判此經依彼三分。一教起因緣分即初序品。二聖教所說分次之六品。三依教奉行分謂囑累品。⁽⁷⁰⁾

円測は、二釈あるとして、まず「一依本記」として『真諦疏』の説く四分法の科文を挙げ、次に『佛地經論』にもとづいた三分法の科文⁽⁷¹⁾を述べている。『円測疏』はこのうち三分法を採用している。『良賁疏』でも三分法が説かれるが、『円測疏』とは各品の配当に相違がある。すなわち『円測疏』は觀空品以下散華品までの五品を聖教所説分、受持品と囑累品を依教奉行分とするのに対し、『良賁疏』は觀如来品以下奉持品までの六品を聖教所説分、最後の職累品を依教奉行分としている。(表参照)

円測の区分は、真諦の四分法とは異なる三分法を採用しつつも、觀空品から散華品までを正説分とする真諦説の影響を受けている。一方良賁は、円測と同じ三分法でありながらこれとは一線を画し、次のように述べる。

釋本文者。然此品經古德西明寺測法師・玄範法師・紀國寺慧靜法師皆以此品爲流通分。天台智者・道安法師・安國大法師皆以此品爲正宗分。⁽⁷²⁾雖皆諸理俱有所憑。今依天台等義如前故。科此品經大分爲三。

良賁は、円測・玄範・慧淨といった唯識系の学匠の説に従わず、智顗・道安・安國大法師⁽⁷³⁾の説を取り、奉持品を正宗分(聖教所説分)に含めている。⁽⁷⁴⁾

『開題』に示される科文は『良賁疏』の各品配当と一致しており、『良賁疏』の引用と考えられる。ただ、

『仁王經開題』の背景思想（足立）

羅什訳を用いると明言しつつ、不空訳の注釈である『良賁疏』の科文に依るという点が注目される。また科文が示された後に「説其所以具如疏釋」とあるが、ここである「疏」が、『良賁疏』を指していることは明らかである。

依教奉行分	聖教所説分					教起因縁分	『開題』 『良賁疏』
	嘱累品	奉持品	不思議品	護国品	二諦品	菩薩行品	序品 觀如來品
	嘱累品	受持品	散華品	護国品	二諦品	菩薩教化品	序品 觀空品
依教奉行分		聖教所説分				教起因縁分	『円測疏』
依教奉行分	王得護国分	正説分				發起分	『真諦疏』

七 護国品の科文

『開題』では各品の中で護国品だけを取り上げ、「二叙来意」、「三釋品名」、「三解本文」の三段に分ける。そのうち「三解本文」において、「初勅聽勸持。次廣釋護法。後辨衆得益」という科文が説かれる。これは

『円測疏』所説の科文と全く同じである。『良賁疏』をはじめ他疏はこれとは異なる科文を採用している。以下に示す通りである。

『開題』

第三解本文者。其文如何。此品之中大文分三。初勅聽勸持。次廣釋護法。後辨衆得益。其中文義具如疏釋之。⁽⁷⁵⁾

『円測疏』

若依本記來分爲四。第一行法。第二能護。第三引證。第四得益(中略)今解不爾。於一品内。文別有三。初勅聽勸持。次當國土下。廣釋護法。後爾時釋迦下。辨衆得益。⁽⁷⁶⁾

『良賁疏』

釋經文者。文分三段。一正明護國。二引昔護國。三聞法獲益。⁽⁷⁷⁾

『開題』は、第六項で述べたように全体の科文は『良賁疏』を依用しているが、護国品については『円測疏』の科文を採用している。『開題』では最後に、「其中文義具如疏釋之。」とだけ述べて、護国品の詳しい釈を「疏」に譲っているが、この「疏」が『円測疏』を指しているのは間違いない。

八 まとめ

●『開題』は、『吉蔵疏』、『智顗疏』、『行信疏』、二本の敦煌出土本から直接的影響は被っていない一方で、『円測疏』、『良賁疏』双方の影響が随所に認められる。また三分科経について述べた後に、「説其所以具如疏釋。」としているのは『良賁疏』のことであり、護国品の科文を示した後に、「其中文義具如疏釋之。」としているのは、『円測疏』のことを指しているのが明らかになった。

弘法大師以前の八世紀後半の中国・日本において『円測疏』の権威の高かったことは、『良賁疏』にはしばしば引用されていること、奈良時代末までの時点で日本に伝わっていた中国撰述注釈疏としては最新のものであったこと、また天平年間に大僧都の地位にいた行信の疏が、『円測疏』の抄出という構成を採用していることからうかがえる。『開題』には、羅什訳と『円測疏』を用いるという点に、奈良仏教以来の『仁王經』理解とのつながりを認めることができる。その一方で不空訳の注釈である『良賁疏』の影響も受けている。つまり『開題』には、奈良仏教以来の伝統的『仁王經』理解の継承ということに加えて、『良賁疏』を利用しようというもう一つ意図が併存していると考えられる。

●『開題』には、全くと言ってよいほど密教的解釈を見出せない。大師の他の開題類の多くが密教的解釈をその特色としている点で、大きく異なる。陀羅尼が付加されるなどして密教的要素が盛り込まれた不空訳『仁王經』ではなく、羅什訳を用いていることから、密教への指向は見出し得ない。また『開題』は不空訳の注釈である『良賁疏』を引用しているものの、密教的要素を持つ部分からの引用ではない。

さらに、密教的解釈を主眼に置いた『般若心経秘鍵』における三時教判に対する態度と、あくまでも三時教判の枠組から離れない本書における態度とに明らかな隔たりがある点からも、同じことが言える。

註

(1) 『定本弘法大師全集』第四卷によれば、本書所収の『開題』には校合本として平安時代末期(院政期)の写本が使用されており、既にこの頃弘法大師の著作としてと存在していたことが確認される。その後真作を疑う説が提出された形跡はなく、現在まで伝わっている。

(2) 経録類には『仁王経』諸訳の記事が見えるが、大正蔵には羅什訳『佛説仁王般若波羅蜜經』二卷(大正No.二四五)と不空訳『仁王護国般若波羅蜜多經』二卷(大正No.二四六)が収められている。

(3) 『佛祖統記』大正四九、三五二

(4) 『日本書紀』、『国史大系』一、二七三

(5) 本経の成立問題については以下の論文に詳しい。

加藤精神「不空訳の『仁王般若経』に関する研究」『中央佛教』二二卷三号、一九三七

望月信亨『佛教経典成立史論』一九四六、四二五—四四一頁・『望月佛教大辞典』第五卷 初版一九三三 増

訂版一九五〇、一四〇五—一四〇七頁・『浄土教の起源発達』一四〇—一五五頁

伊藤古鑑「仁王般若経について」『禅学研究』二二号、一九三四

常盤大定『後漢より宋斎に至る訳経総録』、五五四頁

椎尾辨匡『仏教経典概説』一六八—一六九頁

頼富本宏「護国経典と言われるもの——『仁王経』をめぐる——」『東洋学術研究』十四—三、一九七五

鎌田茂雄『中国仏教史』第四卷／南北朝の仏教(下)、一九九〇、四四頁

『仁王經開題』の背景思想（足立）

(6) 平井有慶「唐代中期の『仁王經』講説」(『豊山教学大会紀要』四、一九七六) 末尾に注釈疏の一覧表が付されておき有益である。

(7) 智顗説灌頂記『仁王護国般若經疏』五卷(大正No.一七〇五)、『天台疏』とも称す。佐藤哲英氏は『天台大師の研究—智顗の著作に関する基礎的研究—』中において、第一に本疏の名が灌頂の『天台智者大師別伝』や道宣の『大唐内典録』に見えないこと、第二に本疏が嘉祥大師吉蔵の疏から多分に影響を受け、また『法華玄義』からの引用が見られる、との理由により、『智顗疏』は天台大師智顗入滅以後智顗に仮託して製作されたと結論づけている。また本邦へは最澄によつては将来されず、『入唐新求聖教目録』に「仁王般若經疏三卷天台」(大正五五、一〇八三、中)とあることから、承和十四年(八四七)の円仁の帰朝とともにたらされたとしている。(前掲書五一七—五五四頁)これが事実であるなら、大師在世中は日本に伝わっていなかったことになる。

(8) 吉蔵撰『仁王般若經疏』六卷(大正No.一七〇七)

(9) 円測撰『仁王經疏』六卷(大正No.一七〇八)

(10) 良賁述『仁王護国般若波羅蜜多經疏』(大正No.一七〇九)

(11) 大正No.二七四四

(12) 大正No.二七四五

(13) 正確な成立年代は不明である。平井俊栄氏によれば、吉蔵の般若經関係の著作の中では最も成立が遅く、会稽嘉祥寺に止住していた開皇一七年(五九七)頃までの吉蔵習作時代の撰述であるとされる。(『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』、一九七六、三六七頁)

(14) 『円測疏』の成立は、疏中に実叉難陀訳『華嚴經』八十巻が引用されていることが成立年代特定の有力な材料になることが指摘されている。(吉田道興「西明寺円測の教学」『印度学佛教学研究』二十五、一)この指摘に

従えば、訳経の始まった証聖元年（六九五）から円測没年の聖暦二年（六九六）までを成立年の幅と考えるべきである。『智顗疏』は智顗滅後、一天台学者により六六四年から七三四年の間に製作されたとされる。（佐藤哲英、前掲書）ただし『智顗疏』が『円測疏』の後に成立したとするなら、『智顗疏』の成立年代は六九六年頃から七三四年に絞れることになる。『良賁疏』の成立は、良賁自身も訳場に列なつた不空の仁王経新訳が成つた永泰元年（七六五）を最上限に設定できる。

(15) 『日本大藏経』一九卷、『大日本仏教全書』一卷

(16) 『定本弘法大師全集』第四卷、一四九

(17) 『定本弘法大師全集』第四卷、一五〇

(18) 勝又俊教氏は、「智顗の仁王経疏三卷、吉蔵の仁王経疏六卷、円測の仁王経疏三卷、良賁の仁王経疏七卷などをさす」（『弘法大師著作全集』二卷、三三二頁の注七）として、大師以前に成立した中国の注釈疏名を挙げている。福田亮成氏も、「その『疏』には、智顗、吉蔵、円測、良賁などのものがある。」（『弘法大師空海全集』第三卷、六九四頁）としている。

(19) 佐藤哲英氏（前掲書）によれば、『智顗疏』は『吉蔵疏』の影響を受けている。若杉見龍氏によれば、『智顗疏』は『円測疏』を参照しているが、逆に『円測疏』は些かも『智顗疏』の影響を被っていないという。（仁王護国般若経疏）『棲神』四一、一九六八）

(20) 武内紹晃「円測の『仁王経疏』をめぐる諸問題——『良賁疏』との対比を中心として——」（『龍谷大学佛教文化研究所紀要』一三、一九七四）

(21) 大正三三、四九四、下、一〇——二二行

(22) 『行信疏』には、既に失われた玄範、慧浄、などの疏が引用されている。

(23) 加藤精神氏は、『開題』は羅什訳に依っているとしている。（『不空訳の『仁王般若経』に関する研究』『中央

『仁王經開題』の背景思想（足立）

佛教』二一巻三号、一九三七）また『密教大辞典』も同様である。一方で『密教辞典』（佐和隆研編）では、『開題』を不空訳に依るものとしている。（五五四頁）

(24) 『定本弘法大師全集』第四巻、一四九

(25) 『密教大辞典』一七六七頁、『密教辞典』（佐和隆研編）五五四

(26) 『御請来目録』、『定本弘法大師全集』第一巻、一二頁、一五

(27) 『遍照發揮性靈集』巻第四、『定本弘法大師全集』第八巻、五十四

(28) 般若・牟尼室利訳『守護国界主陀羅尼經』（大正No九九七）

(29) 不空訳『仏母大金曜孔雀明王經』（大正No九八二）

(30) 『性靈集補欠抄』、『定本弘法大師全集』第八巻、一五六―一五七

(31) 『拾遺雜集』、『弘法大師全集』第三輯 この文章は、『定本弘法大師全集』からは大師真撰が疑わしいとして削除されており、第四巻の『仁王經開題』の注に、その序文として掲載されている。

(32) 『弘法大師全集』首巻、一四四

(33) 大正三三、三六一、中―下 大正三三、四三〇、中

(34) 『定本弘法大師全集』第四巻、一四七

(35) 大正一六、六九七、上―下

(36) 大正三三、三六〇、中―下

(37) 大正三三、三六〇―三六一

(38) 円測はこれとほぼ同じ内容を、『解深密經疏』においても説いている。すなわち、巻一と巻五の合計三ヶ所において、「無相の理を説くという点で第二時教は第三時教と同等であり、この理に依るのであれば皆な第三時了義教である」という内容のことが述べられている。（『大日本統蔵經』二一、一七八、上―下／二九三、

中／二九四、中）

(39) 武内紹晃前掲論文

(40) 大正三三、四三〇、下

(41) 良賁はこの後、『円測疏』と同じく『広百論釈論』の文を引用して清弁・護法の空有の論争について述べている。これらの部分について武内紹晃は、『円測疏』とは根本的に異なる『良賁疏』の意図について言及している（前掲論文、二二頁）。また平井宥慶（前掲論文）は同じ部文について、『良賁疏』と道氤集『御注金剛般若波羅蜜經宣演』（大正No二七三三）の近似性の観点から論じている。

(42) 大正三三、四三三、中—下

(43) 「此約機理漸教法門以辨三時。若大由小起。來無三時前後次第。來華嚴中說唯心是。初成道竟最第一說。此約多分。今論所明二種皆是。若對不定姓大由小起。來第三時教。若唯被菩薩大不由小起。來頓教也。此顯頓漸無別定教。（大正四三、二三〇、上）」

(44) 『定本弘法大師全集』第三卷、五

(45) 大正三三、三三三、上

(46) 大正三三、三七九、下

(47) 大正三三、四五一、上

(48) 『定本弘法大師全集』第四卷、一四九—一五〇

(49) 大正三三、四〇七、下

(50) 大正三三、四〇七、下

(51) またここでは「人天處」という語も用いられているが、これは初めの「人・天・国土」と同じであると考え、て差し支えないであろう。

『仁王經開題』の背景思想（足立）

- (52) 良賁は護国品で『真諦疏』の「国」の二義を引用しているので、真諦の定義を意識していたことは間違いない。(大正三三、四八七、下)
- (53) 『定本弘法大師全集』第四卷、一五〇
- (54) 『開題』は経題釈の段で「國者城域也」とも述べているが、これは『良賁疏』の釈文をそのまま引き写したものであるため、ここでは特に取り上げなかった。
- (55) 『大般涅槃經』「佛正法中有二種護。一者内。二者外。内護者所謂戒禁。外護者族親眷属。」(大正一二、五五九、下)、『望月仏教大辞典』一卷八五九頁「外護」の項、『織田仏教辞典』四三三頁「外護」の項。
- (56) 大正三三、四〇七、下(『円測疏』中の佚文)
- (57) 大正三三、三二三、上
- (58) 大正三三、三四三、下
- (59) 大正三三、四〇七、下
- (60) 大正三三、四五一、下
- (61) 大正三三、四八八、上
- (62) 『仁王經』注疏において内護外護が説かれるに至った背景には、権力者による仏法擁護を期待せざるを得ない仏教側の思惑が深く関係しているのではないかと考えられる。嘱累品には經典の国王への付嘱や、僧制批判とも取れる「七誡」が説かれているが、このような記述は、北魏における仏教統制という歴史的事実を踏まえたものだということが指摘されている。(鎌田茂雄、前掲書、二四八) 初めに能護としての「外護」が説かれたのも、やはり国王に外護者としての役割を期待したためであろう。
- (63) 『定本弘法大師全集』第四卷、一五〇
- (64) 『定本弘法大師全集』第四卷、一四九

(65) 大正三三、三五九、中

(66) 大正三三、四三四、中—四三五、中

(67) 『円測疏』(大正三三、三五九、中)、『良賁疏』(大正三三、四三四、中)。また大正新脩大蔵経における経題は、羅什訳が『佛説仁王護国般若波羅蜜經』、不空訳が『仁王護国般若波羅蜜多經』となっている。ただし羅什訳の注記に、元本と明本には「佛説」が無かったことが記されている。

(68) 『定本弘法大師全集』第四卷、一四九

(69) 大正三三、三六一、下

(70) 大正三三、四三五、中

(71) 『佛地經論』親光造玄奘訳「於此經中總有三分。一教起因緣分。二聖教所説分。三依教奉行分。教所被機來是教起因緣故。名教起因緣分。正顯聖教所説法門品類差別故。名聖教所説分。顯彼時衆得聞佛聖教歡喜奉行故。名依教奉行分。(大正二〇、二九一、下)」

(72) 大正三三、四九四、下

(73) 『智顗疏』には「此經八品。序品爲序分。觀空品下六品爲正説分。囑累品爲流通分。(大正三三、二五五、中)」とある。

(74) この「安国大法師」については詳しいことがわからない。ただし道氤集『御注金剛般若波羅蜜經宣演』に「安国法師釋云。由二乘人不能了此經名爲不了。非謂此經於義不了也。」(大正八五、六一、下)と引用されているのと同じ人物であろうと思われる。『仁王經』の注釈疏を記した唯識系の学匠であろうか。既に平井宥慶氏(前掲論文)により『良賁疏』とこの『宣演』との近似性が指摘されており、『良賁疏』における「安国大法師」の引用は『宣演』との関連を連想させる。

(75) 『定本弘法大師全集』第四卷、一五〇

『仁王経開題』の背景思想（足立）

(76) 大正三三、四〇七、下

(77) 大正三三、四八八、上

【キーワード】 仁王経、仁王経開題、仁王経疏、護国